

スポーツに内在する問題について

－ スポーツの功罪を考える －

奈良文化女子短期大学 幼児教育学科 岡 部 修 一

1. 序 論

スポーツが社会に根づいてから久しい。かつては一部特権階級の娯楽であり、極端な差別主義さえまかり通っていたスポーツだが、今日では誰もが自由に楽しむことができる時代となっている。大衆化されたスポーツの楽しみ方は人それぞれ多彩で、とりわけスポーツビジネスの発展によって「やる」「観る」の二局分化が進んだ。

テレビに代表されるマスメディアにおいても、スポーツの露出度は著しい。スポーツ関連番組が放映されない日は無く、アメリカ大リーグ（MLB）における日本人選手の活躍ぶりが、連日定時のニュース番組で報道されている。かくして人々は好むと好まざるとにかかわらず、毎日のように「スポーツ」という言葉をくり返し見聞きし、あふれんばかりの情報を受け取っているのだ。

このような状況の中で、スポーツに対する世間一般の評価は、極めて好意的である。「楽しむ」「健康的」「感動をよぶ」等々、スポーツにまつわる形容にはプラスを思わせるものが多い。マスメディアはスポーツを「爽やかさ」「ひたむきさ」「努力」といった好感のもたれるイメージで取り上げ、記事や番組をつくり出していく。

一方、学校教育におけるスポーツは、体育として心身両面で人間形成に関わる科目として位置づけられている。運動を通じた身体の健全な発達とルール遵守や集団での協調性といった心の成育をも担っている。

人々は、スポーツに対してフェアプレー精神や爽やかな快活さを連想する。スポーツマンは意志強固な努力家で頑張り屋であると信じ、トップレベルのスポーツ選手は世間の注目を集めるヒーロー・ヒロインとして、子どもたちのあこがれや夢になる。

かくしてスポーツは、健全で価値ある有意義なものとして肯定的な評価を受け、人々に明るく純粋なイメージでとらえられ、夢や希望を与える存在とされるのである。

世の注目を集め人々に好印象をもたれるスポーツであるが、しかし盲目的に称賛され美化される風潮には一抹の危惧を感じざるを得ない。世における他のあらゆる事象と同様、スポーツにも表と裏があり、功罪相半ばする。そして教育現場におけるスポーツは、社会の変化とともに極めて難しい時代を迎えている。

本小論では、スポーツへの無定見な美辞礼賛を戒め、スポーツの本質がもつ問題点や矛盾について記述し、教育の中でのスポーツのあり方について考えていきたい。

2. フェアプレー精神を考える

筆者は学生時代よりバレーボールをやってきた。選手としてのキャリアを終えた後、コーチや監督を務め、指導者としてバレーボールにたずさわる機会を得た。

指導者となって選手に求めたことは「ベストを尽くす」ことであり、練習でも試合でも常に「一生懸命」「精一杯」「手を抜かず」取り組むことを是と考えていた。

手を抜かずベストを尽くすことは、スポーツのフェアプレー精神とも合致するものと考えている。筆者自身は決して世間で考えられているほど、スポーツが純粋で優良なものとは見なしていない。しかし、スポーツを志した限りにおいては、試合での勝利を追求するだけでなく、スポーツを通じた人間的成長を遂げてもらいたいと思うし、スポーツマンシップやフェアプレー精神を考え方や行動の規範として欲しいと願っている。

バレーボールは、制限時間無しに一定の得点到達によって勝敗を決する種目であり、他にテニス、卓球などが同様のスタイルである。そしてこれらの種目では、どちらが先に勝利決定得点に達するかを競い合うため、引き分けという決着はありえない。

球技の中には一定の制限時間内にあげた得点の多さで勝敗を決する種目もある。サッカー、ラグビー、バスケットボール、ハンドボールなどがこれにあたり、野球、ソフトボールも時間ではないが制限回数（インニング制）内で得点を競うとの意味で、同じスタイルと考えられる。そしてこれらの種目の中には、時間切れの引き分けという決着が存在するものがある。

制限時間のある球技種目の場合、残り時間との兼ね合いで時間稼ぎ的プレーを行われる。例えばサッカーにおいて、終了間際リードしているチームがボールを奪われぬよう細心の注意を払いながら、ゆっくりとパス回しを行い時間を稼ぐことがある。サッカー関係者に言わせればそれは当然の作戦と言うだろう。ルールに触れずレフェリーに遅延行為と見なされない限り、それは合法的プレーなのだ。しかしバレーボール経験の長い筆者には、時間稼ぎのパス回しがどうにも姑息な手段に感じられてならない。

制限時間がないバレーボールでは、試合時間中ずっと勝利の決する得点をめざす。常に得点を取るプレーに専念しており、時間に対する駆け引きや引き分けに持ち込むような作戦自体が存在しない。その経験則からなのだろうが、勝ちを決定づけるための必要な作戦と頭では理解できても、「時間を稼ぐ」ような作戦について、批判的になるのである。

時間稼ぎが正々堂々の概念に反している、とそこにフェアプレー精神を持ち出すのは考えすぎかもしれない。それでも勝者（強者）が、勝ちを得るためにルールぎりぎりのずる賢いプレーで相手チームを攪乱し翻弄することが許されるというのは、強い者の論理ではあるまいか。

教育の中でのスポーツである場合、勝つためのずる賢いプレー、時間稼ぎのように強者が弱者を翻弄する概念を、いったいどのように理解させ教えていけばよいのだろうか。

酸いも甘いも噛み分けた経験豊富な大人には、それはスポーツという場面だから許されるとの分別もつけられよう。けれど若い世代とりわけ子供には、そういった判断は難しい。スポーツが人格形成、考え方や行動の仕方に影響を及ぼすとされるだけに、この「強者の論理」というものは、慎重に教えていく必要がある。

3. 甲子園と連帯責任

今夏、甲子園で開催された第87回全国高等学校野球選手権大会は、大会の開幕直前および閉幕直後、不祥事問題で大きく揺れる事態となった。

まず開会式直前、高知県代表明德義塾高校に部員の喫煙および暴力問題が発覚し出場辞退、そして大会終了直後には優勝校である南北海道代表駒大苫小牧高校に部長の体罰問題が発覚した。一時は優勝返上も取り沙汰されたが、最終的に指導者および学校関係者への処分のみで決着した。

全国高等学校野球連盟（以下、高野連）の不祥事に対する厳正な対応は、今に始まったことではない。かつて甲子園出場校に一点の曇りも許さぬ清廉潔白さを要求した時代が長く続いた。例えば非行（暴力や刑事事件はじめ喫煙や飲酒などの行為）を野球部員以外の生徒が行った場合でも、出場辞退処分を課した歴史がある。その後あまりに過剰だと批判が高まったことで、処分の対象は野球部員もしくは野球部関係者の不祥事に限定され、また高野連への報告や学校の処置次第によって、情状酌量の余地が加わるようにもなった。

かつての高野連の姿勢は「連帯責任」を異常に厳しく問うものであった。

よく旧日本軍の

『貴様らあー、そこへ並べ！連帯責任である！歯を食いしばれえー！』そして鉄拳制裁、

という理不尽と思えるシーンが取り沙汰されるが、まさにその「連帯責任」と何ら代わりない概念であった。

決して非行を擁護するわけではないが、高校生という未成熟な年代に一点の曇りもやましきもない学校だけが出場資格があるかのごとき思想は、時代錯誤の排他主義あるいは独裁主義と言われても仕方がなかろう。そして緩和されたとはいえ、この連帯責任の思想は高野連の根幹に未だ脈々と生き残っている。チームの出場停止や辞退を課すことが、本当に教育的に望ましいのだろうか。

「連帯責任」の名のもと高校球児にとって日頃の努力の成果を披露し、目標や夢へとつながる舞台を奪うことが、教育的配慮のいき届いたことなのか。

何より疑問視すべきは、厳正な処分を課すのは高野連だけで、他の競技種目を統括する高体連（全国高等学校体育連盟）では不祥事に対し、高野連のような基準での処分は下さないということだ。

スポーツをする高校生が種目が違うというだけで、起こした不祥事について異なった基準で裁かれているのが現状である。これは明らかに「差別的」であり「不平等」でないだろうか。筆者の理解では日本の教育界は、もうずっと以前より、差別や不平等といったものを過剰なほど排除しようとしてきた。しかるに教育の一環と標される高校スポーツにおける「差別」と「不平等」は今なお放置されたままである。

4. ジュニアゴルファー流行り現象

ゴルフ界で、中高校生ゴルファーの躍進が華々しい話題となっている。

一昨年、宮里 藍選手（当時東北高校3年生）がアマチュアでツアー優勝（ミヤギTV杯）を果たし、

プロ転向後ルーキーイヤーであった昨年には、ツアー5勝をあげ年間獲得賞金ランキングも2位と大活躍した。これが起爆剤となり女子ゴルフ界には次々と有望な10代ゴルファーが登場している。

一方男子でも今年、中学3年生の伊藤涼太選手が男子のプロツアーで6戦連続予選通過という活躍をみせている。

「おじさんのレジャー」と揶揄されてきたゴルフであるが、ここ数年来の10代選手の活躍によって今後ますますジュニアゴルファーの増加が見込まれる。

早くからゴルフにいそませようと親は子をゴルフスクールに通わせ、プロが主宰するゴルフ塾に入門させ、ゴルフ部のある学校に国内留学させる。

他のスポーツ以上に経験則がものをいうゴルフにおいて、年齢的に早い時期から取り組ませることは悪いことではない。タイガー・ウッズは2歳でクラブを握り、5歳で初ラウンドを回ったという。

ただ筆者は昨今の子供のゴルフ流行りには、いささか違和感を感じている。それは子供が楽しむためのというより、プロにしようとの親の欲望が見え隠れするためである。もちろん子供自身もプロになりたいと思っているケースもあろう。しかしそれは宇宙飛行士や消防士、幼稚園の先生になりたいとの憧れと同義ではないか。

問題は子供に将来なりたいものとたずねた際、その答えが宇宙飛行士なら『そう、頑張ろうね』と軽く受け流す親だが、プロゴルファーには目の色変えて肩入れしようとするのだ。

宮里 藍選手ら多くの若手有望選手らが、幼少時から英才教育的指導を受けていたという事実がその風潮に拍車をかけていると思われる。我が子もプロに……そう考える親心は、おそらく宇宙飛行士に比べればプロゴルファーの方がなれる可能性が高い、と考えているのであろう。

しかし努力すべき中身は違えど、道の険しさは同じである。いやむしろ天賦の才能に人並みはずれた体力、努力を積み重ねていく忍耐力と他に追随を許さぬ独自の技術力、ここぞという瞬間すべての実力を発揮できる強固なメンタリティ、さらに運にも恵まれなければならないのがスポーツの世界である。宇宙飛行士となるのと変わらぬほど、プロスポーツ選手の一流、超一流となるのは希有だと言って過言ではない。

ひとりの一流プロ選手の下には、同じような力を持ちながら脱落し挫折した選手が何十人という。また仮にプロになったとしても、功成り名を挙げ豊かな暮らしが出来るのは、ほんのひと握りの超一流に過ぎないのである。

ゴルフに限らず野球、サッカーなどプロスポーツが花形の種目で、我が子をプロに…と夢見る親たちは、そんな現実認識がどこまで出来ているのであろうか。

5. 親の過保護と過干渉

近年の少子化傾向は、スポーツ界にもさまざまな影響を与えている。

子供が少なくなったことで親は我が子に対し、ありったけの愛情を注ぐのである。

かつて家庭は子供が最初に出くわす「社会」であった。

家長主義にあっては父親が絶対的権力を持ち、理不尽と感ずる言に從わざるを得ない。兄弟が

多ければケンカあり、食い物をめぐる生存競争あり、さまざまな上下関係の重さを思い知らされる。

かくして世の子供たちはまず家庭という社会において、コミュニケーションを覚え、物事が思い通りにはいかなくとも我慢と忍耐することを知り、ときには挫折や屈辱さえも味わうこともあった。このような人間形成の準備期間と社会の厳しさへの免疫づくりを経て、初めて他人とかかわる社会へ出ていったのである。

しかし、現在では兄弟は少なくなり、ひとりっ子であれば親はあり余るほどの時間と手間、お金も費やして子供の世話を焼こうとする。

幼い時から部屋を与え、欲しいといえばテレビもゲーム機も買い与え、不自由がないよう、友だちの間で肩身の狭い思いをさせないようにと細心の注意を払うのである。

その結果、何でも自分の思い通りになると考える我慢も挫折も知らない子供が、いきなり社会に出てくるのだ。おまけに個性や個人の自由を尊重するということが、嫌なことはしなくてよいと勘違いさせている。このような子供が集まる「学校」現場が、集団行動の場として混乱し困難な事態に陥るのは容易に想像できるであろう。

スポーツにおいても、子供に入れ込む親の振る舞いがエスカレートする。

練習のサポートや試合での応援にとどまらず、技術指導や作戦面にまで口を出し、果ては我が子をなぜ使わないと選手起用に不平を言う。親の欲目と過干渉ほどスポーツの現場にとって迷惑な存在はない。

前述したジュニアゴルファーについても、早い時期からゴルフをやらせればプロになれると安易に考えるのは親の欲目であろう。

また、ゴルフは他のスポーツ種目にもまして経済的負担が大きい。用具を買い揃え、練習場でのボール代にレッスン料、ゴルフ場でのラウンド代、頻度をあげればあげるほど、その額は大きくなる。そして車での送り迎えも必要である。

筆者が目撃した中学校1年生男子のジュニアゴルファーの例は、練習場にはいつも父親の車でやって来る。キャデバッグ運びも受付も父親任せ、レッスンではインストラクターが他の受講生の指導に回った途端、すぐさま椅子に座って携帯電話をいじり出し、彼が時間内に打つボールは多くて他の3分の1程度である。そんな本人の様子を知ってか知らずか、父親が強豪ゴルフ部のある高校へ行かせるつもりと話しているのが聞こえてきた。

彼が父親の期待通り、ゴルフに目覚める日は訪れるのであろうか。

6. 物を賭けないと頑張らない学生たち

最近、大学生相手の体育実技で思うことがある。

例えばバドミントンの授業でゲーム形式を行う時、学生に声をかける。

「先生と勝負しようか」

『いいですけど、勝ったら何かおごってください？』

学生から声がかかる。

『先生、試合しましょう！』

「おお、いいよ」

『勝ったらジュースかアイス買ってください』

さらにこんな提案をもちかけてくる学生もいる。

『先生に勝ったら、授業休んでもいいってことにしましょう』

要するに何か得になることがなければ、ゲームに熱中できないというわけだ。

そのたび学生たちには、かつてのアマチュアリズム提唱者の如く話しをしてきた。

「スポーツというのは、お金や物をかけてやるものじゃないよ。自分の体や心と対話をし、自己への挑戦を楽しむようにしなくちゃ！」

『エッ～そんなの何の得にもならないじゃないですかあ！』

確かに、スポーツをしても金銭的には一文の得にもならない。

それにしても、いつから行動の動機づけに損得勘定の占める割合がこれほど大きくなったのであろうか。

学生たちの言葉が全て本気なのかどうかはわからない。ただの言葉のキャッチボールであり、コミュニケーションを楽しんでいるだけかもしれない。

しかしこれはここ数年、大学生世代に共通に現れた風潮であることは確かだ。

世の中に「ひと山当てて大儲け」のギャンブル的な風潮が蔓延している影響かもしれない。

人気種目の超一流プロスポーツ選手の賞金や年俸は、庶民感覚からかけ離れた金額で推移し、天性のひらめきと卓越した技術でそれを手にする。もちろん彼らはそこに至るまで凄まじい鍛練と研鑽を重ねているのだが、そういった努力の部分は表面に現れず、試合でのまさに一瞬のひらめきで成功を得て大金を手にするかのように受け取られているのかもしれない。

またテレビでは、クイズ一問に数百万円の賞金が掛ることも珍しくはない。

「額に汗して働く」は死語になったのかと感ずるほどに、人々は財テクに知恵を絞り、頭を使って如何に稼ぐか、そこに世間の耳目が集まっている。

そんな社会情勢の中、学生たちの間に儲けや得することに執着する傾向が生まれたのであろうか。

7. スポーツと体罰

スポーツと体罰は深く関わりがあると言わざるを得ない。最近では減少傾向にあるとはいえ、スポーツ指導者の「体罰」が問題となる事件は毎年くり返し起きている。

いわゆる体罰について、その是非を問われた場合、答えは難しい。

もちろん怪我をさせるのは論外で、これは如何なる理由があろうとも重大な責任を問われ激しく糾弾されるべきである。

しかし体罰は一切「非」かといえば、筆者の見解はNOである。

『体罰は指導者のヒステリーで自己抑制がきかない』

『説明し言い聞かせる能力も根気も持たない無能さの裏返し』

『体罰は、指導者と選手、教師と生徒という絶対関係での暴力行為』

などと評され、社会は体罰に対して異常なほど過敏に反応する。手をあげる行為すべてを暴力とみなし、まさに世の中から体罰を根絶しようとするかの如しである。

しかし、すべて言葉で話して言い聞かせることが可能なのだろうか。

人は痛みを伴って感じることや覚えることもある。禅宗の座禅では集中力が欠けてくるとお坊さんに警策で喝を入れてもらう。これと同じとは言わないまでも、叩かれる意味を理解させられるならば、その上で手をあげることは是と考える。

識者と呼ばれる人々の中に、スポーツの場面で体罰はダメだが代わりに技術的な特訓や体力トレーニングを課せばよいと述べている人がいた。

しかし、この意見は現実認識が甘いに過ぎない。スポーツ界では長年、特訓という名のシゴキやいじめが行われてきた。排斥されるべきは、こうした陰湿な悪しき伝統と暴力的体罰なのである。

教育現場で「怒るは感情、叱るは理性」とされるが、時に理性をもって手をあげることは、許されべきであろう。

8. まとめ

一般論としてスポーツは世の人々に好感をもって受け入れられている。

しかし、強者が弱者を完膚無きまでに圧倒するような非情さや、強者の論理がまかり通る不平等と思えるような一面もあり、決して爽やかで純粹といったイメージだけで語ることは出来ない。

社会情勢の変化は、スポーツを取り巻く環境に大きな変貌をもたらした。

損得勘定でスポーツへのモチベーションが維持される風潮や、現実認識や見通しの甘過ぎるプロ志望などを思えば、スポーツの人気や好感度とは幻影の上に成り立つかのような危うさを感じてしまう。

本来スポーツは、自己認識と自己改革をもたらし人間形成を行うことが可能である。

教育の目的が正義感や良心、自尊心の確立にあるとするなら、スポーツはフェアプレー精神の薫陶と、存在する不平等さや理不尽さを経験することの反面教師的側面により、その一端を担えるであろう。

ただし教育システムの中でスポーツがより機能するためには、子どもの育てられ方や、親たちの考え方や、感じ方による対応を、時代や社会情勢ごとに考えていく必要がある。

参考文献

- ① 岡澤祥訓 (2001) メンタルを考えよう 株式会社卓球王国
- ② 玉木正之 (1999) スポーツとは何か 講談社
- ③ 安井伸之 (2001) 日本のゴルフは世界の不常識 日本文化出版
- ④ (2005) 週間ベースボール 9月19日号 ベースボールマガジン社